石巻市に関する文化的リソースを利活用した芸術プログラムの開発実践研究

代表　　向井 知子（日本大学芸術学部デザイン学科 准教授）

研究報告要旨

当初本研究プロジェクトでは、プロジェクションマッピングを前提とした石巻の歴史文化にまつわる映像制作と、取材の過程で作成した映像リソースを活用したワークショップの企画などを念頭においていた。しかし、現地での取材を通して、地元の現状に即していないと判断し、研究内容の方針を変更した。震災 3 年目の 2013 年の石巻の文化的営みを記録するものとし、かつ、歴史文化的資料として、地元の方々が将来的に利活用できるアーカイブ用映像リソースの作成、映像データのインデックスデータを作成することに特化し、最終的には関係者や研究機関等が、データを受け入れ可能な状態にすることをめざした。具体的な調査対象としては、北上川流域に育まれた生きた文化の象徴として、無形文化財を取り上げることとし、2 つの法印神楽を中心とした郷土芸能の取材を行った。1 つ目は雄勝町に伝わる雄勝法印神楽（国指定重要無形民俗文化財）であるが、雄勝の複数の郷土芸能の保存会が共同で第 1 回目の芸能祭「おがつ秋の芸祭 鼓舞」を立ち上げる機会と重なったこともあって、法印神楽のみならず、芸能祭自体を取材の対象とした。2 つ目は、石巻市牧山の牡鹿法印神楽（宮城県指定無形民俗文化財／国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財）である。伝承の歴史も長く「国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」とされており、石巻市中心街に一番近い地域で育まれてきた法印神楽であるが、取材前の時点では、古い映像記録しか残されておらず、現状を把握し記録に残しておくべき対象であると判断した。

これら 2 つの地域の無形文化財を主軸に取材を行い、映像リソースを作成するとともに、それらリソースと取材内容を活用し、一般の人に親しみやすいパンフレットを作成した。映像や写真リソースから起こしたデザイン・イラストレーションなどを活用して、地域内外の人々や子ども達が手軽に手に取り、土地と歴史、縁の文化財についても、その魅力をわかりやすく知ることのできる、簡単な紹介・教材パンフレットとして使っていただけるようなものを制作した。